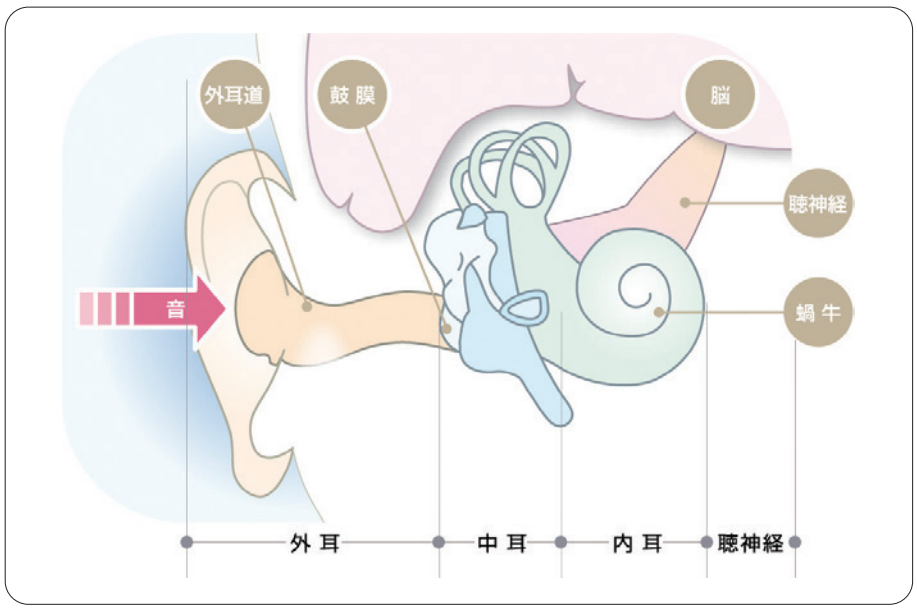
聞こえにくさや耳鳴りが起こる仕組み

聞こえにくさが起こる仕組み

普段、音は耳の穴（外耳道）を通って鼓膜を振動させます。この振動が内耳の蝸牛（かぎゅう）という部分で信号に変わり、脳に伝わることで「音」として感じられます。しかし、この仕組みのどこかに問題があると、音が聞こえにくくなります。



たとえば、耳垢（みみあか）がたまりすぎて耳の穴がふさがると、音がうまく伝わらなくなります。また、鼓膜に穴が開いていたり、中耳炎で耳に膿（うみ）や液体がたまったりすると、鼓膜が振動しにくくなり、聞こえづらくなります。さらに、年を取ることで蝸牛が音の信号を作る力が弱くなると、聞こえが悪くなります。

外耳や中耳の問題と補聴器の役割

耳垢を取ったり、中耳炎を治療したりすると、外耳や中耳の問題は改善することが多いです。しかし、蝸牛の働きが弱くなった場合は、簡単に治す方法はまだありません。そのため、「聞こえにくさ」に対し補聴器を使うことが勧められます。

年を取ることで起こる難聴は人それぞれですが、50歳を過ぎたころから少しずつ感じる人が多いです。この難聴はゆっくり進むため、自分で気づきにくいことがあります。

耳鳴りが起こる仕組み

音は最終的に脳の「聴皮質（ちょうひしつ）」という部分で感じています。聴皮質には、蝸牛から送られる信号に対応する神経細胞があり、いつでも信号を受け取れるように準備しています。

しかし、蝸牛の働きが弱くなると、脳に届く信号が減ります。その結果、神経細胞が反応しにくくなります。さらに信号が減り続けると、聴皮質の神経細胞が自分で勝手に動き出し、これが「耳鳴り」の原因になることがあります。

耳鳴りは、難聴と関係がない場合もまれにありますが、多くは蝸牛の働きが弱くなったことにより起こります。この仕組みを理解して対処することが大切です。

補聴器を使うタイミング

「聞こえにくいなら補聴器で音を大きくすればいい」と思うかもしれません。実際、補聴器を使えば蝸牛に無理やり信号を作らせて脳に伝えることができます。しかし、長いあいだ聞こえにくい状態が続いていると、聴皮質の神経細胞がさぼり癖をつけてしまい、補聴器を使ってもすぐには反応しないことがあります。

そのため、補聴器を使うときは、ゆっくり時間をかけて、神経細胞がまたきちんと働くようにする必要があります。この点からも補聴器は聞こえがとても悪くなってからではなく、軽度～中等度の難聴の段階で使い始めることが勧められます。

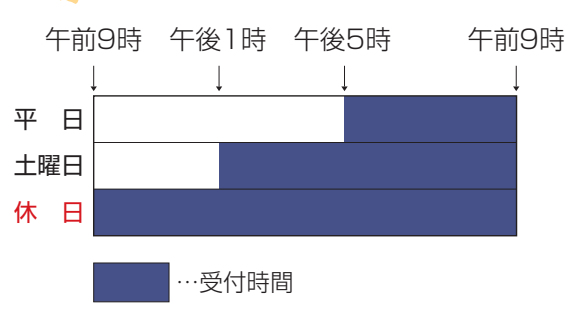
補聴器を買うときは、こういった仕組みをよく理解している信頼できるお店を選ぶことが大切です。まずは耳鼻科を受診してみてください。

（相模原市医師会　越智　健太郎）

休日・夜間の急病診療制度の利用

まず、かかりつけの医師に相談してください。かかりつけの医師が不在、近所の医療機関で診療が受けられない方は

☎042－756－9000
相模原救急医療情報センターへお電話してください。
（聴覚または音声・言語機能に障害のある方専用）
FAX　042-756-3030



市民のみなさんへお願い

◇診療可能な医療機関を案内します。
◇医療相談・歯科案内は行なっておりません。
◇急病で困ったときに利用してください。
◇**応急診療**が目的ですので、翌日はかかりつけの医師または近所の医師の診察を必ず受けてください。
◇**健康保険証（マイナンバーカード等）**を必ず提示してください。提示されないと自由診療扱いとなり、費用が高額になります。
◇救急車は、生命に危険が生じた患者さんを一刻も早く運ぶためのものです。安易な利用は避けてください。
◇歯科の急病については**相模原口腔保健センター☎042－756－1501**へ（ウェルネスさがみはら２階）
◇**服用している薬がある場合は、お薬手帳もしくは処方された薬をお持ちください。**

救急車を呼ぶか判断に迷ったときは　**かながわ救急相談センター**　**☎#7119**（24時間）　市外局番が042の固定電話、IP電話の場合　**☎045-232-7119/045-523-7119**

※次回発行　令和７年７月１日　掲載テーマは「帯状疱疹ワクチン」、「熱中症にご注意ください！」の予定です。